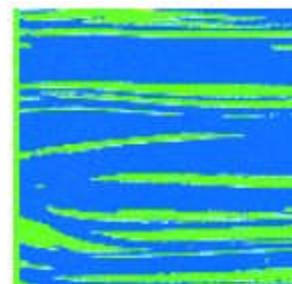


日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース



2011年 夏号 No.63 (2011年8月20日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

| | |
|---|--------------------|
| 東京でお待ちしています..... | 第29回年次大会準備委員長・木村 裕 |
| 第9回実践賞候補者公募のお知らせ..... | 研究教育推進委員会 |
| 第5回論文賞の選考について..... | 研究教育推進委員会 |
| 英文抄録作成支援ボランティアの紹介について..... | 機関誌編集委員会 |
| 国際会議のお知らせ：持続可能な世界をつくる行動改革 —Behavior Change for a Sustainable World—..... | 島宗 理 |
| 連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職(9) “Never Say Never” | Kaori G. Nepo |
| ABAI2011 体験記(1)：さらなる一歩へ！..... | 木下奈緒子 |
| ABAI2011 体験記(2)：嗚呼、素晴らしき哉 Denver...!! | 長谷川福子 |
| 自著を語る：『学校支援に活かす行動コンサルテーション実践ハンドブック —特別支援教育を踏まえた生徒指導・教育相談への展開—』..... | 大石幸二 |
| 編集後記..... | ニュースレター編集部 |

東京でお待ちしています

木村 裕

(第29回年次大会準備委員長／早稲田大学)

東日本大震災は耐えなければならない大きく深い痛みをすべての人に残しました。重々しい気持ちのままではありますがみなさまとご一緒にお見舞いを申し上げたく存じます。

本年次大会はもともと3年前にお引き受けしているはずの大会でございました。しかしその時期にはキ

ャンパスは建築工事の真っ最中であるとの見通しがありまして、やむなく本年まで延期させていただきました。現実には諸事情のためいよいよ本格的に建築工事が軌道に乗りましたのが昨年の12月からになってしまいました。本来ならば、本年は新装成りましたキャンパスで快適な状況のもとに皆様をお迎えできるは

ずでございましたが、工事現場へご案内するような事になってしまいましておおいに恐縮している次第でございます。会期として設定させていただきました9月18日と19日は、キャンパス内で工事の行われていない唯一の連休でございます。ご不便の多い中ではございますが、準備委員会一同、精一杯努力いたします。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

今年の次大会へのポスター発表のお申し込みは、途中ご辞退もございましたが最終的には87件ほどいただきました。昨年度の件数と比較いたしますと少ないかと感じてはおりますが、懇親会へのご出席は88名の皆様からご予約をいただいております。予約参加者数は182名となっております。

今大会では特に大会としてのテーマを立てることは致しませんでした。当初は種々の心理療法をご専門とされていらっしゃるそれぞれの分野の先生方にお願ひ申し上げまして、様々な介入のあり方を考えることを目指すようなテーマを設定しようとしておりましたが、結局このことは、第1日の大会企画のシンポジウム(福井至先生オーガナイズ:「行動分析学のさらなる発展のために」～さまざまな介入場面から考えられること～)に反映させていただくことになりま

した。

中野良顯先生に特別なご尽力をいただきまして、招待講演をRichard W. Malott先生にお願い申し上げることができました。他の学会では予定されていた来日をキャンセルされる事例が見受けられますが、Malott先生は快くお引き受け下さいました。はじめは自閉症関係のご講演をいただく予定でございましたが、その後ご相談を経まして、行動分析学にたずさわる研究者における研究と実践に関するあるべき姿をお話頂くDream Chasersという演題に変更されました

第2日目は、多数の企画が並立した状態で連続しております。自主企画シンポジウムが3と自主企画ワークショップが1つ、また学会企画のシンポジウムとワークショップが1つずつ計画されております。午前中には、教育セッションが2コマ分組まれております。もう一つこの日の午後には大会企画講演として、西川文二先生に犬のしつけ(トレーニング)に関しましてその背景となっている理論や考え方の紹介と実演をお願いしております。

みなさまのご出席をこころからお待ち申し上げます。

第9回実践賞候補者公募のお知らせ

研究教育推進委員会

実践賞とは、「我が国における行動分析学を応用した優れた実践の普及」を目的としています。社会的な課題を解決するために、行動分析学を応用して取り組んでいる個人や組織をご推薦下さい。これからの活躍が期待できる萌芽的な取り組みも対象となります。候補者推薦は、常時、受け付けております。候補者は非会員でもかまいません。推薦の締切は2012年2月末日です。推薦に必要な書式は、学会webサイトからダウンロードできます。なお、参考までに、歴代の受賞者は以下の通りです。

第1回(2003):高畑庄蔵氏(富山大学教育学部附属

養護学校)

第2回(2004):野口幸弘氏(大野城すばる園)

第3回(2005):山崎裕司氏(高知リハビリテーション学院)

第4回(2006):芻田文記氏(国立職業リハビリテーションセンター)

アニマルファンシィアーズクラブ
京都市立総合支援学校(全7校)

第5回(2007):受賞者なし

第6回(2008):武田建氏(関西福祉科学大学)

第7回(2009):NPO法人つみきの会

第8回(2010) : 受賞者なし
学会賞の目的や選考方法などについては、学会 web
サイトの「学会賞・実践賞規定」をご覧ください。学会

賞に関するお問い合わせは、担当常任理事（浅野俊
夫・井澤信三）までお願いします。

第5回論文賞の選考について

研究教育推進委員会

今年は3年に一度の論文賞選考の年にあたります。論文賞とは、「我が国における行動分析学の優れた研究の促進および活性化」を目的としています。今回の論文賞の対象となるのは、機関誌『行動分析学研究』の第23巻～第25巻(2009～2011年度)に掲載された、すべての論文です。

選考は、選考委員(理事)による記名投票と、会員の方による無記名投票の合算によって行われます。選考委員の1票は5点、会員の1票は1点で合算し、得票合計点が最上位の論文を選びます。会員の方には、10月中には投票用紙を発送します。論文賞としてふさわしいと思われる論文に、1票を投じてご返送下さい。基礎、応用、あるいは理論的分析において、さらなる発展へとつながりそうな画期的な研究をお選び下さい。みなさんのご協力をお願いします。

なお、参考までに、歴代の受賞論文は以下の通りです。

第1回(2003) 望月要・佐藤方哉(2003) : 行

動分析学における”パーソナリティ”研究. 行動分析学研究, 17(1), 42-54.

第2回(2004) 小田史子(2004) : オペラント条件づけによる子イヌのトイレトレーニング : 家庭における室内トイレトレーニングの介入事例. 行動分析学研究, 18(1), 10-24.

第3回(2005) 中野良顯(2005) : 行動倫理学の確立に向けて-EST時代の行動分析の倫理-. 行動分析学研究, 19(1), 18-51.

第4回(2006～2008) 奥田健次(2005) : 不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果-トークン・エコノミー法と強化基準変更法を使った登校支援プログラム-. 行動分析学研究, 20(1), 2-12.

学会賞の目的や選考方法などについては学会 web サイトの「学会賞・論文賞規定」をご覧ください。学会賞に関するお問い合わせは、担当理事（浅野俊夫・井澤信三）までどうぞ。

英文抄録作成支援ボランティアの紹介について

機関誌編集委員会

行動分析学研究に論文を投稿したいけど英文抄録の作成に自信がない。受理されるかどうかもわからない

いうちから英文校閲サービスに高い料金を支払うのもためられる...

そんな声に海外で行動分析学を勉強している日本人の方から支援の手が差し伸べられます。

編集委員の奥田健次先生にお願いし、本年度の ABAI Expo にて在米日本人行動分析家に声をかけていただいたところ、自分も勉強になるので協力させて下さいという暖かいお申し出を数名の方からいただきました。

そこで今年度後半には英文抄録作成支援ボランティアの紹介を試験的に導入してみることにしました。2012年3月末までの期間限定サービスです。

英文抄録作成支援を依頼したい会員の方は行動分析学会の「投稿のてびき」と「執筆要項」に即した形式で原稿を用意し、編集事務局 (editor@j-aba.jp) までメールでお送り下さい。投稿論文と区別がつくように、英文抄録作成支援の依頼であることを明記して下

さい。

なお、試験的な導入ということもあり、申請資格は以下のように限定させていただきます。

(1) 行動分析学会の学生会員または正会員で、大学などの研究機関に所属していないこと (大学の教員や研究者の正会員には非適用とさせていただきます)。

(2) 英文抄録を作成後、当該論文を行動分析学研究に投稿すること。

(3) 無償ボランティアであり、ボランティアの方もご自身が勉強されながら、また、行動分析学を学ぶ祖国の仲間との共同作業を経験したいという心意気で協力して下さいということを十分に理解し、最後まで丁寧に気持ち良くやりとりができる方。

皆さまからのご投稿をお待ちしております。

(編集委員長 島宗 理)

<国際会議のお知らせ>

持続可能な世界をつくる行動改革

— Behavior Change for a Sustainable World —

島宗 理
(法政大学)

地球はかつてない危機的な状況にあります。人為的な温暖化により環境が破壊され、種が死滅し、気候が大きく変動し、生活環境が急速に悪化しています。次の世代に巨大な負の遺産を残さず、この美しい地球とそこに生きるすべての生命を守るために、私たちは私たちにできることを今すぐに始めなくてはなりません。

私たちにできること、それは私たち自身の行動を変えることです。ただし、それを地球規模、世界全体で進めることが求められています。

温暖化に歯止めをかけ、持続可能な世界をつくるために、それだけ多くの人々の行動を変えるは、どうすればいいのでしょうか？

行動分析学は人の行動を変容させ、望ましい行動を増やすための様々な技術を、エビデンスを重視する自然科学の方法論にもとづいて開発し、洗練させてきました。これまで、学校や病院、企業や施設などで、目に見える大きな成果をあげています。環境問題についても、ゴミ投棄やリサイクル、省エネにまつわる行動変容の研究成果が積み重ねられています。

国際行動分析学会の機関誌である *The Behavior Analyst* の第33巻2号 (2010) には、オハイオ州立大学地理学科の Lonnie G. Thompson 教授による論文と (氷河の消失と CO2 の増加から地球温暖化を検証し、警鐘しています)、この警告に対する行動分析学家からの提案が 6 つの意見論文として掲載されて

います。この号は下記の URL から無料でダウンロードできます。持続可能な世界をつくるために行動分析学家に何ができるのか、何をすべきなのかを考えさせられる特集となっています。

<http://researchnews.osu.edu/archive/thebehavioranalyst-climatechange.pdf>

この特集号に引き続き、来年の8月には、オハイオ州立大学（コロンバス，USA）にて、この大きなテーマに正面から取り組むための国際会議が開催されることになりました。会議では、個人や地域、学校や企業、そして世界規模での行動的な介入に関心のある学生、研究者、実践家、教育者、地域のリーダーや、経営者、官僚や政治家など、多様な分野で活躍し、この大きな問題に取り組もうとする人たちに参加を呼びかけ、持続可能な世界をつくるための行動変容について話し合います。様々な領域における専門家による講演やパネル、シンポジウムやワークショップが企画されています。参加者が各自の取り組みを紹介し、発表するポスター発表や、参加者同士が専門領域を超えて議論するフリートークの機会も設けられる予定です。この会議についてのより詳細な情報は、国際行動分析学会の下記のサイトをご参照下さい。9月までには招待講演者も一部決定され、ポスター発表の申請受付も始まります。発表申込のメ切りは12月7日の予定です。

<http://www.abainternational.org/Events/susconf2012/>

日本のCO2排出量は世界で4位、一人当たりの排出量はインドの9人ぶんとも言われています（オーク

リッジ国立研究所）。温暖化により海面水位が1m上昇すると、日本でも410万人に被害が出るという推計もあります（IPCC 第三次評価報告書）。日本は京都議定書の策定においてはリーダーシップをとっていましたが、その後は政権が安定しないこともあり、大きな成果をあげているとは言えません。しかし、一方では、震災や原発事故の影響で企業や家庭における節電への取り組みがこれまで以上に盛んになるなど、草の根的な行動変容は他国に比べて進んでいると言えます。すだれやよしず、打ち水を使って涼をとったり、ゴーヤなどを使って緑のカーテンを作ったりする地道な工夫や、エコポイントというインセンティブを使った省エネ家電への買換え誘導策などは、他国からみても興味深い取り組みになるのではないのでしょうか。ぜひ、この会議でも日本からの情報発信ができればと思います。

すでにこの領域で研究や実践をされている方も、これから始めようと考えておられる方も、これを機会に考えてみようと思われている方も、ぜひこの会議にご参加下さい。

国際行動分析学会主催の会議ではありますが、行動分析学以外の専門家や実践家との交流も目指していますので、お知り合いの方で興味のある人をご存知であれば、ぜひお声をおかけ下さい。

○日時：2012年8月3日（金）－5日（日）

○主催：国際行動分析学会

○会場：オハイオ州立大学（コロンバス，オハイオ，USA）

○その他：プログラムの詳細や、参加費、宿泊費などについては、今後、上述の web サイトにて案内される予定です。

<連載：海外で学ぶ学生，海外で働く専門職（9）>

“Never Say Never”

Kaori G. Nepo, M.Ed., BCBA
(Autism Life Support)

私は現在、アメリカの東海岸フィラデルフィア郊外で、Behavior Analyst として働いています。クライアントは、主に自閉症をもつ5歳から65歳以上とニーズも様々ですが、とてもやりがいを感じています。私がアメリカに来たきっかけは、心理学への関心が薬学を学んでいるうちに高まったことでした。化学と数学が大好きで、それが生かせる仕事に就ければと薬科大に進んだ私でしたが、もともと人との係わり合いがある仕事がしたいと思っていた私は、少しずつ薬剤師としての仕事に疑問を持ち始めていきました。特に、薬局でのバイトをし始めたときこれは私のしたい仕事とは違うのではないかと強く思うようになりました。結局、3年間近く薬学を学んだ後、アメリカへの留学を心に決めました。もちろんアメリカ留学の目標を達成させるには、大変な道が待っていました。両親の猛烈な反対を押し切って、英語学校で英語を勉強し、TOEFLを受けて、なんとか Temple University の日本校に入学しました。その後、2学期目を終えるころ Temple University の奨学金を受けて1994年にやっと念願のアメリカ留学を果たしました。

もちろん、本校留学後の勉強はさらに大変なものでした。読み書きと聞き取りはクラスの内容をこなすくらいはなんとかできましたが、話すことは苦手で、授業の Discussion に参加するのには結構時間がかかりました。いくつかのクラスで、教授に進められたという何人かのクラスメートから Tutor をしてくれないかと声をかけられて、少しずつ会話になじむことができました。今思えば、クラスになかなか参加できなかった私に教授たちが気を使ってくれていたのかもしれない。



れません。あるいは、授業で発言がほとんどない割には、成績だけはよかった私を不思議に思っていたのかもしれない。

さて、念願のアメリカ留学を果たしてから様々な心理学のクラスを取っているうちに、たまたま取ったのがフィリップ・ハインライン先生 (Phil Himeline) の行動分析学基礎のクラスでした。今まで取った心理学のクラスに比べると、“すべて納得がいった”というのが、最初のABAの印象でした。もともと理系の私には、目に見える行動とそのデータを分析するというのがなじみ易かったとも言えるでしょう。それからいくつか行動分析のクラスをとった後ハインライン先生に進められて、ABAのマスタープログラムに入りました。大学院時代は、ハインライン先生のLabを手伝いながら、行動分析の本を読んでほどんどその世界に惹かれていきました。

マスタープログラムのインターンシップで、自閉症の人たちと働く機会を通じて、ABAの奥深さと効果を学びました。ほんの少しずつでも、日々の生徒たちの成長を感じることでできる仕事にやりがいを見つ

けました。それから、勉強の合間の時間をいくつかの学校とプログラムでの実習に当てました。その当時時間のやりくりはとても大変でしたが、クラスでは触れることのできなかつた実践からしか学べないアプリケーションの方法を体験できたことで、今のコンサルタントとしての基盤ができたと思っています。

卒業後はいくつかのプロバイダーを通じて、Behavior Consultant として働き始めました。やっとなビザとグリーンカードをサポートしてくれる会社で働き始めたのもつかの間、ビザを獲得してすぐに、所属の Autism Program が閉鎖になり、また職を探さなければなりません。その後就職が決まった会社でまたビザを取り、グリーンカードを申請している間に今の主人と結婚することになりました。グリーンカードが取れた後は、Independent Behavior Consultant として働き続けてきました。そして 2008 年に自閉症のティーンのための学校で Clinical Director として働く機会がありました。その学校の研究発表で久しぶりに参加した ABAI で、日本やアメリカで活躍されている Behavior Analysts に奇跡的にも出会えたことで、ここで体験談を書くことになりました。

ここでは詳細は伏せておきますが、正しいことをしたのが裏目に出たことで学校を昨年離れることになり、今の独立プロバイダーとしての設立に至ります。

そして最近ではいくつかの大学や学校からコンサルタントの依頼が直接来るようになりました。

数々の経験を通して大切だと思うことは、“何でもあきらめずに信じたことをやってみること”。両親の反対を押し切ったことも、ABA に出会ったことも、英語の勉強に苦労したことも、昨年仕事で苦い経験をしたことも、これらの積み重ねで今の私が成り立っているということ。たとえば、あの時アメリカに思い切ってきていなければ ABA に会うこともなかったかもしれないし、あの年 ABAI に参加していなければ、日本人 Behavior Analysts に会えなかったかもしれない。去年学校を離れていなかったら、今のような数々の機会に恵まれなかったかもしれない。どれをとっても私にとってかけがえのないものだったと思います。たとえ思い通りにならなかったことでも、頑張ってきたからこそ学んだこともあり、また try したことだけでもよかったと思えるのだという気がします。今後まだまだたくさんやりたいことがあります。きっとこれまで以上にいろいろなことがあるでしょう。しかし、これまでのように何でも少しずつあきらめずにやっていきたいと思います。これからも一人の Behavior Analyst として リサーチとセラピーに携わっていかれることと、ABAI で出会った皆さんとの交流の続くことを願って、私の体験談を閉じさせていただきます。

< ABAI2011 体験記 (1) >

さらなる一歩へ！

木下 奈緒子

(同志社大学大学院心理学研究科心理学専攻)

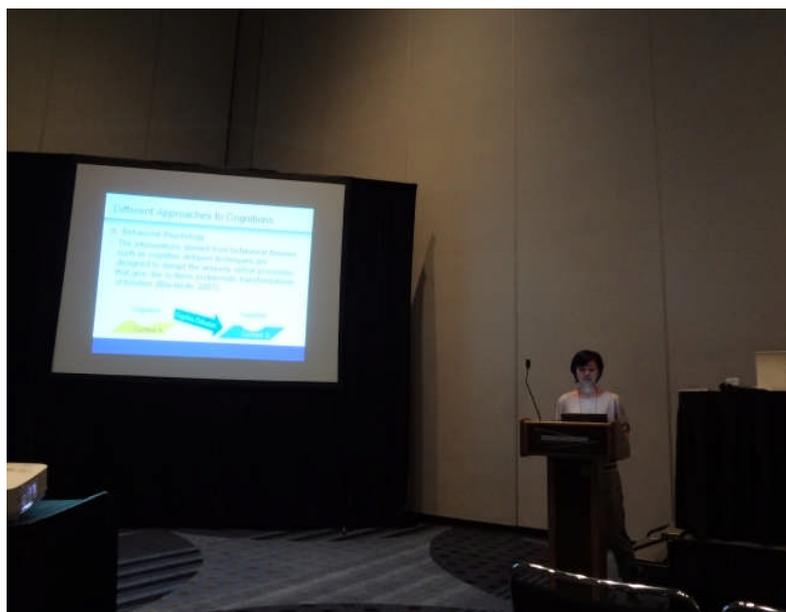
日本行動分析学会から「日本在住学生会員の ABA/SQAB 参加の助成」をいただき、5月27日から

31日に開催された第37回国際行動分析学会 (ABAI) に参加してきました。

“せっかくだらなくならたくさん発表したい!”と、シンポジウムとポスターにエントリーしていたため、発表準備に追われながらの出発となりました。ABAIへの参加は初めてでしたが、何より大会プログラムの多さに驚きました。参加したいと思うプログラムが重なっていることも多々あり、どれにしようかと迷うほどの充実さに幸せを感じました。発表準備をしながら、プログラムをチェックし、期待と興奮で胸がいっぱいになりながら日本を旅立ちました。

学会2日目の午後、シンポジウムで口頭発表を行いました。今回、アメリカの大学院生数名とともに、このシンポジウムを企画しました。メンバーの1人が、他学会のメーリングリストにて、シンポジウムに関する呼びかけをしていたのをたまたま見かけ、“ABAIに行ってみたいし!面白そう!”と思い、思い切って返信をしたことをきっかけに、一緒に企画するに至りました。その後、企画や準備はメールのやり取りのみで行ったため、彼らと直接会うのは発表当日が初めてでした。会場でお互いを見つけると駆け寄ってハグをし、私は、語学力でハンデのある私をここまでサポートしてくれた彼らに心から感謝しました。残念ながら、オーディエンスは十数名程度と、比較的少ない人数でしたが、論文を繰り返し読んでいた憧れの研究者の姿をその中に見つけた時は、とても嬉しく思いました。発表中は、ただただ夢中になって話し続けました。日本の大学院生の存在を世界の人に知って欲しい、1人でも多くの人に伝えたいという想いから夢中になって話しました。完璧な発表には程遠いものでしたが、ディスカッションの時間に、フロアから質問をしていただけたときは、発表内容が伝わっていたということを実感でき、とても嬉しくなりました。

ポスター発表は、学会3日目のお昼に行いました。



ポスター会場に着くと、その広さとポスターの多さに圧倒されました。当初は、これだけの発表数だと、自分のポスターには誰も来てくれないのではないかと考えていましたが、そんな思いも束の間、発表の時間が始まると、休む暇もないくらいに、日本の先生方や海外の先生方が次々に発表を見に来てくださいました。たくさんのフィードバックをいただき、ABAIに参加している人たちが持つ研究への情熱には本当に驚きました。そして、“来年もこの場に絶対に来たい”と心から思いました。

自分の発表以外の時間帯は、シンポジウム等に参加し、さまざまな発表を聴きました。また、海外の先生とランチをしながら、研究の相談をさせていただいたり、今後の研究について熱く議論したりと、有意義な時間を過ごすことができました。

学会4日目の夜、Local Beer SIGというイベントにも参加させていただきました。Local Beer SIGには、日本からABAIに参加されていた先生方や学生さん、アメリカの大学院に在籍している日本人の学生さんや実際にアメリカで働いていらっしゃる行動分析家の方などが参加されていました。参加されていた方々は、それぞれ地ビールを片手に、活発な情報交換をされていました。日本では得られない新たなネットワーク作りの場として、Local Beer SIGの役割はと

でも大きいと思います。今回は、一参加者として、素敵な時間を過ごさせていただきましたが、今後は、Local Beer SIG の活動において何かできることがあれば、積極的にお手伝いさせていただきたいと思いました。

今回、日本行動分析学会の助成をいただき、このような貴重な体験をすることができました。また、研究の実施や発表準備にあたって、多くの方にサポートをしていただきました。先日、他の国際学会で、今回

シンポジウムと一緒に企画した大学院生と、再びシンポジウムを企画し一緒に発表を行いました。たった1通のメールから始まった関係が、これほどまでに広がっていくとは想像もしていませんでした。ABAI への参加を通して、研究をする上で国境はない、思い切って一歩踏み出していくことが大切なのだということを改めて学びました。このような素晴らしい機会を与えてくださったことに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

<ABAI2011体験記(2)>

嗚呼、素晴らしき哉 Denver...!!

長谷川 福子

(常磐大学大学院人間科学研究科)

この度、2011年5月27日から31日にColorado州Denverで開催された国際行動分析学会への参加に対して日本行動分析学会から「日本在住会員のABA/SQAB参加に対する助成金」を受けました。改めて、この場をお借りして感謝申し上げます。

まず、ABAIが開催されたDenverについて簡単にご紹介致します。Denverはmile high cityと呼ばれ、海拔約1600mに位置する都市です。これは富士山の4合目と同じ海拔で、少し歩いてだけで息切れするほどの海拔です。市街からはRocky山脈の山並みを望むことができます。

このような素敵な都市であるDenverで開催された学会における私の体験をみなさんにお伝えいたします。

今回、私の指導教授である森山哲美先生との連名で、私はポスター発表を行いました(ただし、森山先生は、都合でABAIを欠席なさいました)。事前に、私の研究と類似した研究を行っているSchneider先生、そし



て imprinting の研究を行っている UNT(University of North Texas)の学生に会って、私達の研究について意見交換することを目標としていました。残念ながら、私は彼らの発表を聞くことはできなかったのですが、私の発表に、他の先生方に交じって Schneider 先生と

UNTの学生が聴きにきて下さいました。

Shneider先生がいらっしゃった時、私は、彼女がShneider先生本人であることに途中まで全く気が付きませんでした。しかし、彼女が私の実験について質問してくるうちに、「この方、imprinting研究にとっても詳しいぞ...」と思い、私は、彼女のネームプレートを見ました。Schneider先生ではありませんか！何とご無礼なことを！彼女が何者であるかを知った途端、私は大興奮してしまいました。彼女も何かを察したかのように、2人で熱いハグと握手を何度も交わしました。一方、UNTの学生とは実験手続きについて議論しました。ポスター発表終了時には、3人でimprintingの研究と愛着行動の研究との関連について議論しました。

ポスター発表で上述のような貴重な体験をしたわけですが、それ以外にも大変貴重な体験をしました。それは、「Understanding Behaviorism」の著者であるBaum先生にお会いして、お話をする機会を持つことができたことです。Baum先生の講演後に、「今がチャンスだ!」と自分に言い聞かせ、衝動的にBaum先生に話しかけました。Baum先生の著書である「Understanding Behaviorism」を常磐の学生数名と一緒に読んでいるという話をすると、Baum先生はとても喜んで下さいました。彼の笑顔につられて、私も嬉しくなり、2人でハグしました。「このような短期間に何人もの著名な人とハグすることなんて滅多にないな...やっぱりABAIに参加するって良いな...。」と感動しました。

私は、以上のような経験を通して、アメリカの研究者と物怖じせずにコミュニケーションをとるという度胸を身につけることができました。そして、以上のような経験は、今後の私の研究に対する知的好奇心をかりたてるものでした。

一方、学会ならではの経験だけでなく、それ以外のところでも有意義な経験が沢山ありました。一つは、地ビールをみんなで楽しむ会である、Local Beer SIG

への参加でした。美味しいビールが飲めたのは勿論、日本の先生方や学生の方、そして、アメリカで研究を進めている方々とお話することができました。彼らから、私の実験に対してアドバイスを頂いたり、研究活動についての貴重な意見を伺うことができました。また、アメリカでの研究の裏話もお聴きすることができました。彼らから頂いたアドバイスを、今後の私の研究に役立てたいと思いました。

学会以外の有意義な体験の二つ目は、滞在中に「食」を楽しんだことです。現地の食べ物を食すことによってその国や地域の文化を知ることができるものです。Denverでは、「Colorado rocky oyster」という料理が有名です。Denver滞在5日目にして、Colorado rocky oysterを食べる機会がありました。これを食べればDenverの文化を体感できる!.....モグモグ.....味の是非はともかく、私は現地の文化を楽しむことができました。ところで、オイスターという名前がついていますが、カキではありません。意外なものがオイスターと呼ばれているのです。どのような食材の料理なのかは皆さんで調べてみて下さい。

今回のABAIでの私の経験をまとめると、以下のようになります。(1)自分が追求したい内容を異なる手法を使って検討している他の研究者と議論を交わした。(2)海外の憧れの先生方とお話することができた。(3)日本の先生方、学生の方々とより密に交流できた。(4)現地でしか味わえない美味しい料理やお酒を堪能できた。

以上の経験は、ABAI参加の意義であったと言えるでしょう。これらの経験は、強化履歴として今後の私の研究活動に深く影響してくることでしょう。さらに、この体験記が、将来ABAIで発表しよう、あるいは参加しようと考えている方々の行動の弁別刺激もしくはプロンプトとして機能すれば幸いです。

最後に、この度は日本行動分析学会から助成金を頂き、貴重な体験ができました。学会理事の方々や学会でお世話になりました多くの方々に、この場をお借り

して、改めて心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

Baum, W. M.(2005). *Understanding behaviorism: Behavior, culture, and evolution* (2nd ed.). Malden, MA: Blackwell.

<自著を語る>

『学校支援に活かす行動コンサルテーション実践ハンドブック —特別支援教育を踏まえた生徒指導・教育相談への展開—』

大石 幸二

(立教大学)

1. はじめに

行動論的介入の効果性の検証・拡張の努力は、①実験室場面から日常場面へ、②専門家による介入から非専門家による介入へ、③直接的で集中的な介入から間接的で間歇的な介入へ、④個人に対する介入から集団・組織・コミュニティに対する介入へと向けられて、行動コンサルテーションはこのような努力の中で成立・発展してきた。本書は、行動コンサルテーションについて、わが国の発展をふまえて著した実践ハンドブックである。

2. 本書の視座

そもそも私たち（加藤と大石）は、2004年にそれまで個人的努力として重ねられてきた行動コンサルテーションに関する研究と実践の努力を集め、『特別支援教育を支える行動コンサルテーション—連携と協働を実現するためのシステムと技法—』を刊行した。本書は、この加藤・大石（2004）において指摘された課題を解決するために編まれ、その後のわが国における行動コンサルテーション研究・実践の発展を踏まえて出版された。また、特別支援教育というプリズムをとおして見えてくる学校教育のスペクトラムを考慮に入れて、行動コンサルテーションの新たな可能性

を展望することを目的とした。加藤・大石（2004）が通常学級や特別支援学級、特別支援学校、家庭・地域などさまざまな場における行動コンサルテーションの実際を取り扱っているのに対して、本書では、学級担任、特別支援教育コーディネーター、校内委員会、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、巡回相談員などさまざまなコンサルタントが行う行動コンサルテーションの実際を取り上げた。そうすることで、行動コンサルテーションを用いて解決できる問題の範囲を展望することが可能となった（加藤・大石、2011）。

3. 行動コンサルテーションの基本モデルについて

そもそも行動コンサルテーションは1960年代後半から（遅くとも）1970年代初頭までにその技術体系が確立した。Erchul & Martens（2006）によれば、その基本モデルは以下の3つである（表1参照）。

これら3つの基本モデルのうち、バーガン・モデルは、それが①明確な問題解決モデルであり、②実証的な根拠に富み、③インテグリティやアクセプタビリティのような行動コンサルテーションの重要概念を取り扱う枠組みを明確にしており、かつ④コンサルタントとコンサルティとの相互作用や相互強化の問題に

表1 行動コンサルテーションの基本モデル

| 提唱者 | 名称 | 概略 |
|--|----------------------|---|
| D'Zurilla & Goldfried(1971) | 問題解決モデル | 展望・定義・方法探索・意志決定・効果評価の5段階から成る |
| Tharp & Wetzel(1969) | 自然場面への行動変容法適用モデル | コンサルタント・メディエーター・ターゲットの三者関係を想定。メディエーターにスタッフ・トレーニングを行う介入法から成る |
| Bergan & Kratochwill(1990) Kratochwill & Bergan(1990) | 行動コンサルテーションのバーガン・モデル | コンサルタント・コンサルティ・クライアントの三者関係を想定。問題同定・問題分析・計画実行・効果評価の4段階から成る |

も言及しており、今なお私たちを刺激し続けている。また、FBAやPBSを専門とする研究者・実践者、ABAをペアレント・トレーニングやスタッフ・トレーニングに応用している研究者・実践者、whole school や school-wide, community-wide の取り組みのなかで集団随伴性を整備したり、分析している研究者・実践者にとってもバーガン・モデルは参考のできる部分がある。そのため、行動コンサルテーション(バーガン・モデル)は、応用行動分析の主要な検討対象とされている。本書でも、わが国の学校文化や風土の随伴性に晒されながら、多くの工夫を試みている著者の多くはバーガン・モデルを意識している。

ところで、わが国の特別支援教育の発展の中で、特別な教育的ニーズの捉えられ方の変化や長期にわたる縦断的な変容のモニターの必要性の示唆、システム・チェンジに対する行動論的なアプローチの有効性の検証が求められる中で、加藤・大石(2004)には見られなかった新たなトピックが本書で取り上げられている。

4. 本書の特長

わが国において行動コンサルテーションは、背景と

なる理論・心理学史上の位置づけが明確な、リプリケーションが可能である技術体系を有する唯一のモデルだということができる。本書でも、既存のモデルの説明率の限界点を見出すべく著者らは果敢な挑戦を続けている。古田島(第6章)は、通常の学級において授業参加度を高めるための多面的介入を提示し、米山(第7章)と小林(第8章)は、不登校対策・学校復帰支援のためのチーム・アプローチを考察している。大石・脇・大橋(第9章)は、集団・組織・コミュニティへの介入について行動コンサルテーションの適用可能性を検討している。野口(第10章)と澤本・松岡(第11章)は、保護者を支援チームの一員として位置づける努力が示されている。

5. 行動コンサルテーション研究・実践の課題

行動コンサルテーションにより、コンサルティの抱えるどのような問題まで解決することが可能だろうか。たとえば、以下のような課題が私たちの前に立ちはだかっている。

(A) ドゥズリラの問題解決モデルでは、コンサルティの抱える情緒的問題にも焦点を合わせている。けれども、わが国の展開の中ではこのような問題の解決

支援案の提示はほとんどみられない。

(B) バーガン・モデルでは、コンサルタントの行動を従属変数とする研究も見られるが、わが国の展開の中では行動コンサルテーション研究の従属変数は専らクライアントもしくはコンサルティの行動である。

(C) 北米の行動コンサルテーション研究では、作業所の生産性を高めるための効果的な集団フィードバック・システムの開発や、教室内の相互作用を変化させるためのシステムズ・アプローチの適用など、行動システム・コンサルテーションの研究報告が少なくないが、わが国では行動ケース・コンサルテーションの研究報告がほとんどすべてである。

これら「前人未踏」の領域にチャレンジするための弁別刺激として本書が機能すれば、編著者の一人としてとても有り難い。そして、まだ記述されていない潜

在的な領域の取り組みを掘り起こし、体系化していく努力を本学会の会員の皆様と共に進めてまいりたい。

(学苑社, 2011年)

引用文献

- Erchul,W.P. & Martens,B.K.(2006) *School consultation: Conceptual and empirical bases of practice*. Springer Science & Business Media. 大石幸二監訳 (2008) 学校コンサルテーション—統合モデルによる特別支援教育の推進—. 学苑社.
- 加藤哲文・大石幸二編著 (2004) 特別支援教育を支える行動コンサルテーション—連携と協働を実現するためのシステムと技法—. 学苑社.
- 加藤哲文・大石幸二編著 (2011) 学校支援に活かす行動コンサルテーション実践ハンドブック—特別支援教育を踏まえた生徒指導・教育相談への展開—. 学苑社.

編集後記

残暑お見舞い申し上げます。今年の夏も体温並みの日が何日もありましたが、なんだかそれが当たり前のようになりつつあります。しかし、被災地の皆さんのことを思うと、この暑さとの闘いも大変だったことと拝察します。

先日、台湾に出張した折り、地震後の日本人の行動は非常に沈着冷静で規律正しく、尊敬に値する、と何

度もいわれました。日本にいるとそうでもないように思いますが、他の国の行動パターンと比較するとそのようです。

次の秋号は11月末頃に発行予定で、担当は野呂委員です。私の担当は本号が最後になると思います。これまでの会員皆様のご協力に感謝いたします。

(園山)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱いに、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学障害科学系園山研究室気付

日本行動分析学会ニューズレター編集部

園山 繁樹

E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp

日本行動分析学会第29回年次大会

会場：早稲田大学戸山キャンパス

会期：2011年9月18日－19日

| | | 8:30 | 9:00 | 11:00 | 13:00 | 14:00 | 15:30 | 18:00 | 20:00 |
|-------|------|-------------|-------|-------------|-------|-------------|-------|---------------|-------|
| 18(日) | 受付開始 | ポスター発表 | | 大会企画シンポジウム | 昼食 | | 会務総会 | 招待講演 | 懇親会 |
| | | | 常任理事会 | | 理事会 | | | | |
| 19(月) | 受付開始 | ポスター発表 | | 学会企画シンポジウム | | 大会企画講演 | | 自主企画シンポジウムII | |
| | | 自主企画シンポジウムI | | 自主企画ワークショップ | | 学会企画ワークショップ | | 自主企画シンポジウムIII | |
| | | 教育セッション | | | 編集委員会 | | | | |

〈交通アクセス〉

J R山手線 高田馬場駅 徒歩20分

西武線 高田馬場駅 徒歩20分

地下鉄東京メトロ 東西線 早稲田駅 徒歩3分

地下鉄東京メトロ 副都心線 西早稲田駅 徒歩12分

スクールバス 高田馬場駅—早大正門、馬場下町 下車